国際シンポジウム／ワークショップ

歓迎挨拶

ムハンマド・ナシル（シアクアラ大学大学院事務長）

Muhammad Nasir (Sekretaris, Program Pasca Sarjana, Universitas Syiah Kuala)

みなさま、本日はご出席ありがとうございます。私は、シアクアラ大学大学院長の代理としてまいりました大学院事務長のムハンマド・ナシルです。

2011年3月11日の東日本大震災では、たいへん大きな犠牲が出たと伺っています。人的な被害、物的な被害、ともに大きかったと聞いております。ともに津波で大きな災害を経験した両国が災害対応に関して協力を進めることはたいへん喜ばしいことだと思います。とくに、災害後の復興・再建のプロセスは早く展開するため、それに関係する情報はさまざまで多様なまま、充分に整理されていません。地域情報学の知見を用いてこれらの情報をどのように整理するのか考えるという目的で行われるこのワークショップを私たちは歓迎しています。

今回のワークショップでは、地域情報学のさまざまな知見が共有されると伺っています。また、地域情報学の一つの大きな成果である災害情報マッピング・システム――「災害と社会　インドネシア災害情報マッピング・システム」と「2004年スマトラ沖地震・津波アーカイブス」の二つが公開されるとも聞いています。

このワークショップで期待されるもう一つの成果としては、津波ツーリズムがあります。バンダアチェ市内にはさまざまな津波の遺物がありますが、これらをもとに地域の創造的復興をとげる地域開発の基礎としたいと考えています。

また、本ワークショップでは、シアクアラ大学の防災研究専攻の大学院生を中心に、地域情報学の技術についての講習会が開かれます。これはシアクアラ大学の大学院教育にとっても大きな貢献になると期待しています。さらに、本ワークショップを通じてシアクアラ大学津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターが今後の研究・協力や他のさまざまな開発において持続的な協力関係が築けることを期待しています。

このたびのワークショップが、すでに開発された災害情報マッピング・システムを用いてバンダアチェ市に津波モバイル博物館を発展させる契機となればと考えています。また、シアクアラ大学津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターとのMoU（大学間学術交流協定）が結ばれることで、両者の協力関係がより発展すると期待しています。

研究科を代表しまして、本日ご列席の報告者のみなさま、参加者のみなさまに感謝の言葉を申しあげるとともに、本ワークショップ・シンポジウムの盛会を祈ってご挨拶とさせていただきます。